



I はじめに

分科会を始めるにあたり、実践協力者の自己紹介、諸注意等がなされた。

その後、報告資料集記載の内容をもとに、分科会基調と討議の柱の確認がされた。「部落問題をはじめとするさまざまな人権問題の解決をめざす教育をどう創造しているか」という分科会テーマに沿って、差別の現実を見つめ、さまざまな取組による子ども・保護者・教員をはじめとするまわりの大人の変容について報告レポートをもとに議論していくことが実践協力者より呼びかけられた。

日程説明の後、報告・討議に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

－報告1－⑥

「あたりまえ」からの始まり

～私が出会った人たちから～（香川県同教）

－主な質疑と意見－

三重 しんどい家庭背景を持つ子どもや保護者はたくさんいると思う。園での子どもや保護者に対する啓発について教えてほしい。

香川 保護者をサポートする体制や近隣の学校との連携についてのことを教えてほしい。

報告者 保護者啓発については、誕生日会に保護者を呼んで、子どもも保護者も園でも自分の命を大切にすることの大切さを確認している。家庭教育学級の間でも人権教育について保護者と一緒に考えている。サポート体制については、北浦地区の保護者会があり、部落について学べる場があったり、児童館の支援員さんの支えがあったりしている。校種間連携については、「土庄町人権同和教育連絡協議会」があり、子どもや家庭の情報交換や授業や保育の公開をして情報交換している。また、共通実践交流会の間でも様々な校種間での縦や横のつながりを大切にしている。

奈良 祖母の声の感じが変わった場面についての質問。職員の対応について保護者（祖母）は、色々と思うことがあったのだと思うが、どのようなこと

があったのか具体的に教えてほしい。また、被差別部落にルーツのある子が通う園としてどのような校内研修をしているのか気になった。さらに、仲間づくりを大切にしていくと報告があったが、どのようなことをしているのか教えてほしい。

報告者 職員のあいさつが祖母にとっては他の保護者と比べて自分にはあまりないと感じていたことがあった。職員にとってはそのようなつもりはなかったが、そのように思われてしまっているのであれば、今後はしっかりと全職員で祖母を含め様々な保護者に園での子どもの様子を伝えていこうと確認をした。職員研修は、日々の保育の中に人権に関わる気づきを共有していたり、月に一度土庄町で人権について考える研修があったりする。仲間づくりでは、日々のトラブルについて丁寧にに関わり、一人ひとりを認めることを大切にしている。

福岡 園と子どもや保護者の絆の強さを報告から強く感じる事ができた。今回の報告の中にあっような「部落やから…」という発言は、報告者だけでなく他の職員も保護者から打ち明けられたことはあるのか知りたい。また、はるさんの保護者の被差別体験について詳しく教えてほしい。最後に、報告者自身の差別との出会いについての経験があれば教えてほしい。

報告者 みきさんの保護者は、1・2歳の時の担任や園長にも話をしていた。はるさんの母親が幼いころから受けてきた差別については、「部落の子と結婚をしたらその兄弟が結婚できなくなる」や「けんかをするとう部落の人はみんなで押しかけてくる」というようなことを言われ続けてきた。また、小学校6年生のころに勉強ができなかったことに対して「これやから部落の子は」と言われた経験もあったとのこと。自分自身のまわりでの部落問題との出会いについては、自分の友だちも部落を理由に交際することを反対されたということがあり、相談を受けたことがある。

山口 みきさんの祖母が先生に対して「うちが部落やからやろって思うことがある」と言ったのは、今思うとどうしてだと考えるか聞かせてほしい。きっと祖母は、先生と一緒に考えてほしかったことがあったのだと思う。報告の中にあっ祖母の言葉に対して「どうすることができないもどかしさや辛さ」とは、どういうことか教えてほしい。

報告者 ちょっとしたことでもマイナスにとらえられてしまうという今までの差別経験やでもそれに負けずに子育てをしているという思いを伝えかけたのだと思う。どうすることもできないというのは、私がどのように祖母に返したら誤解を解くことができるのか上手に答えることのできないもどかしさがあった。「そんなことないですよ」という言葉は、部落が理由で今回のようなトラブルになったり、そのように思われたりすると思っている祖母の思いに対する言葉だった。

熊本 みきさんの祖母の被差別体験がはっきりしないとこの問題の深い部分は見えてこないと思う。園として聞いていることがあれば教えてほしい。
報告者 祖母から聞いたのは、「あそこの家に行ってはいけない。」「あそこの子とは遊んではいけない。」「けんかをしたり、学校を休んだりすると部落の子やからと言われる。」というようなことをずっと言われてきたという内容だった。このような経験から無意識に周りの人の反応を気にしたり、どのように思われているのか気になったりするようになってしまっている様子。

大阪 どうにかしたいけれど、なかなか自分ひとりではどうすることもできないというもどかしさが自分の経験とも重なった。家庭の背景をつかむことはとても大切なことだと思う。報告者が子どもや保護者と関わる時に大切にしていることを教えてほしい。

滋賀 保護者と関わる中で大切にされてきたり、工夫されてきたりしたことを教えてほしい。

保護者 子どもと接するときには、一人ひとりを否定せず、認めていくということを大切に、楽しい保育を心がけている。保護者と接するときには、自分の中の「当たり前」と保護者の「当たり前」は違うということを大切に、自分の当たり前を押し付けずに、保護者の頑張りにも共感することを大切にしている。

三重 自分たちにできることは何なのかを考えるときに大切なこととして、保護者は学校の先生に対してどのような立ち位置で、この部落問題に対して先生自身がどのような考えをもっているのかは必ず問われることだと思う。報告者自身が保護者に部落問題に対する思いを話した経験があれば教えてほしい。

報告者 部落問題について、この園に赴任するまでは自分ごととして考えていなかった。でも、この園での様々な出会いと経験により、差別がどうしたらなくなるのか真剣に考えることになり、私にできるのは子どもたちや保護者の思いに共感をしていくことが大切だと考えている。

－報告2－⑧

陽介との出会いを通して

～あきらめずかわり続ける～（大阪市人教）

－主な質疑と意見－

東大阪 先生と陽介のかかわりは1年かけてじっくり向き合っていてよかったと感じた。これまで、周りの子とつなぐとき、学校としてどのようにサポートしていたか。先生とのかかわりは分かったが、周りとの陽介のかかわりが見えてこなかったため、陽介は分からないことをだれに伝えているかエピソードがあれば教えてほしい。

奈良 特別支援の担任をしていると、行事の変化を受けやすい子がいた。その時に自傷行為や教室を飛び出す場面などもあった。そんな中、周りの子は陽介をどう見ていたかが気になる。周囲には受け入れられない行為として映っていないか知りたい。また、そういった行動の背景にある思いを先生が周りにどう伝えていたのか教えてほしい。

報告者 4月の段階ではわかっていて声掛けしている子もいた。これまでの担任の力だと思う。一方、初めて同じクラスになった子は、頭を机に打ち付ける陽介を見てどうしても引いてしまっていた。SDGsの授業にとりくんで、周りの子も認め合い、お互いを考えて成長し合おうと学習を通して伝えていった。赤白帽を忘れた子を周りの子が気にしていなかったため、そういうのをほったらかしにしたらだめだよと伝えるなど日常で意識させてきた。「陽介のことを学級で話していいですか」と母親に許可を取って語ったこともあった。クールダウンが必要なこと。時間・場所を守って自分なりにやっというようにしていることを伝え、「陽介自身は今頑張ろうと思っているからみんなで見守っていきましょうよ。みんな苦手なことはあるんだから、そういうのを認め合ってみんなで笑顔あふれる学級にしましょう」と話した。

奈良 支援担任との連携も教えてほしい。
報告者 自分の思いを伝えられた時は先生たちに共有していた。週に1回学年会がある。学年担任などが集まって、それぞれの子について今どんなことに困っている、どんな支援をしていこう、など話している。電子ボードに写真を撮って映し出して学習の流れが見えるようにしようなど、具体的な対策を連携して考えている。

三重 報告者は今何に困っているのかとか、どう思っているのかというその子の背景まで常に疑問に思っていてすごいと思う。余裕がない時はそんな風に思えないことがある。知り合いの先生から、その子の行動に対して「不思議だなあって思うように」と教えてもらった。理解できない行動を見たとき「何してんの」とかつい言葉に出してしまうが、そうではなく、一度「不思議だなあ」とその子を考えてといいと教わったことを思い出した。

今後の成長として、陽介のどんな姿を見据えてどんな力をつけさせたいと思っているのか。
報告者 トラブルをなくするにはどうすればいいのか、本人が友達と楽しく過ごす環境を自分でつくれるようにするにはどうすればいいのかを日々考えている。来年中学生でこれまで以上に陽介も母親も不安を抱えている。2学期から気持ちに浮き沈みがあったり、授業に入れず苦しんでいたりで、本人がどうやったら安心して楽しく過ごせるだろうかと考えていた。最近、作品展があり将来の夢を考えた。その時初めて陽介から「世界を回る力

メラマンになりたい」と聞いた。そこから本人がすごく変わった。英語が嫌いだと抜け出していたが、「世界を回って写真撮らなあかんから英語一生懸命頑張ろう」と、英語の学習に入れるように。社会も同じように授業に入り、ノートをとるようになった。本人にとって具体的な目標ができたというのも学習に前向きになってきた背景だと感じる。

熊本 陽介自身がこんな時はこうしてほしいと友達に直接うたえているか。

報告者 支援学級の子と喧嘩することもあるが、お互いに好き勝手に言い合える友達がいる。その子に「そういう言い方をされたら僕も腹が立つ。だからそういう時はこういう風に言い換えてほしい」と言っていたことを覚えている。交流学級の子に言っている場面は見えない。

熊本 支援学級担任はどんなにかかわりをしているか聞きたい。

大阪 報告者の学校で陽介さんとかかわっている者です。陽介は環境に敏感で縦割り班活動にも入れていなかったが、今は入れるようになってきた。特別支援学級でもSDGsの取り組みをしていて、クラスを3つのグループに分け、個性を生かしてできることをしていた。陽介は作ることが大好きで、好きな生き物を調べてすごろく形式にしてゲームを作る活動に積極的に参加していた。好きなものをきっかけに支援していくのがとても成長につながる支援の仕方だと思う。

大阪 陽介がクラスの中でどう過ごしたいなどどんな願いをもっているのか。そしてその願いはクラスの周りの子はどれくらい知っているのか。

報告者 陽介がどんな気持ちで学校に行っているのか周りに聞いたり説明したりはしていない。これは課題として受け止めさせてもらう。

大阪 これは陽介の課題ではないと思う。陽介と周りの子がともに課題を見つけて、どう解決していくかが大事だと思う。周りがどうしたらクールダウンできるなど、周りの子が陽介のことをわかっていたからこそ落ち着いて安心して過ごせたなどのエピソードはあるか。

報告者 陽介が授業中わからなくて困っているとき、「今ここ書いてんで」と友達が教えてくれるなど、学習中に自然に助けている。自然体験学習でも先生が付きっ切りになるのではなく、周りの子が「こするんやで」と教えたり、枕投げを楽しんだりとか、お互いを理解している場面をよく見てきた。

熊本 先生の一生懸命さが差別をなくす取り組みになっているかが大事だと思う。その差別をなくすとりくみというのは、教師、自分自身の生き方や暮らしが問われるものだと私自身突き付けられている。陽介との出会いから報告者自身が自分の生き方や暮らしの中身で考えさせられたことや向き合

うようになったことがあったら教えてほしい。

報告者 授業中に飛び出す、授業をちゃんと受けない、座ってられない、学習に集中できない…など厳しく怒るときもある。こうしなきゃいけないという自分のルールに教師自身が乗っかって指導するのではなく、その子自身がどうしたいのかっていうのをしっかり考えてとりくんでいくことの大切さを陽介と出会って再確認できた。どうしても、これまでの指導してきたやり方、こうやったらうまくいったという体験があってその通りに指導してしまいたくなるが、陽介は陽介でいろいろ成功してきた経験がある。それを踏まえて陽介にはどうしていったらいいんだろうなと考えていくことが大切だと学んだ。

－報告3－⑤

「変わることを楽しみながら」（熊本県人教）

－主な質疑と意見－

香川 「被差別部落を有する学校への赴任はショックだった」という表現と「同和教育は私にとって、父を取り戻した教育」というのは、どういう意味をもっているのか。

報告者 初任校が被差別部落を有する学校で、赴任が決まり自分がそこでやっていけるのかという不安があった。しかし、そこでは、地域の人たちと共に学ぶ機会が多く、その中でたくさんの学びを通して自分自身がいかに無知であり「差別意識」の持ち主であることに気づいた。

さらに、自分が最も身近な父親に対して取っていた行動が、人を排除したとれほど父にとってつらいものだったのかを理解することができた。

奈良 子どもの意見を聞きながら、しんどい子どもが輝くことができる手立てとは何か。

報告者 まず、自分自身が足を運び家庭訪問をして、子ども達の生活背景を知る努力をすること。生活を知ることで「なぜ、あの子は忘れ物ばかりするのか。」など子どもの実態を理解することができる。理解をすることで、関わりの際にかける「ことば」も大きく変わってくる。その様子は他の子どもたちにも影響する。子どもを理解しようとする努力もしないで、注意ばかりをしていくと、子ども同士も注意ばかりしあう関係性ができてしまう。表面上落ち着いたりおとなしくなったりしていても、それは教師自身のやりやすい雰囲気子どもたちがあわせて行動しているだけである。

子どもたちの本当の気持ちを大切に、子どもたちが話したいことをどんな小さなことも聞き逃さず、拾いあげていくことで、子どもたちをつないでいくことにつながっていく。

りゅうさんについても、感受性の鋭さゆえ、周りに受け止めてもらえないところがあった。

りゅうさんのくらしをクラスみんなに伝えたり、がんばりを紹介したりすることで、みんなとりゅう

さんをつないでいく努力をした。このことは、クラスのみんがお互いのことを受け入れることやそれぞれのちがいを大切にできる学級集団にかわっていったとききっかけになったと言える。

奈良 子どもが子どもを理解していくために、他にはどんな手立てがありますか。

報告者 りゅうさんは算数のたし算、ひき算が苦手であった。でも、お家で苦手な計算に向き合う努力をしていることをりゅうさんの家族から教えてもらった。りゅうさんのくらしを実際に見て知るために、りゅうさんの様子を「取材」に行った。りゅうさんの家族は旅館の仕事をしていて、りゅうさんもそこで割りばしの袋詰めの仕事を手伝っていた。さらに、忙しくなるとりゅうさんは、妹や弟の面倒もみていることもわかった。割りばしを紙の中に入れ、10の束ずつ分けていく作業を一生懸命に頑張るりゅうさんの姿があった。10の束を作る作業から算数の問題を作り、クラスに持ち帰り授業の中でりゅうさんに出題してもらった。算数のほかに、りゅうさんのお家の仕事を通した学習クイズを作成し、クラスのみんが考え大いに盛り上がった。学習に対して自信が持てなかつたりゅうさんであったが、自分の努力をみんなが知り、共感してくれたり、応援してくれたりすることで、自分のありのままを認められたことの嬉しさが自信につながりいきいきと学習に励む姿がこの日以降、見られるようになった。

りゅうさんのお母さんも大変よろこばれ、「これからは生活の中で、一緒に学習に取り組めるように頑張っていきます。」とのことだった。

りゅうさんのくらしを通して、お互いが理解しあえる教材づくりに取り組むことは、クラスの子もたちのりゅうさんへの見方を大きく変えていくだけでなく、クラス全体が、お互いの存在のありのままを受け入れよう、認めようという意識が生まれることにつながり、それぞれの子もたちも、自分のくらしを素直に語るができるクラスへと成長できたと言える。

報告者 「教師の変わり目にこだわればいい」という言葉を先輩からかけてもらったことを忘れずにいる。それは、教師は、子どもたちの生活背景をしっかり受け止め、見つめていくこと。そのためには、自分から子どものくらしの中に足を運び、話を聞き、自分の目で知る努力を怠らないことが一番大切なことであるという意味である。「働き方」など、さまざまな葛藤やギャップがあるなどの課題はあるが、これからも、子どもたちや親たちのくらしを理解し、目の前の子どもの現状の背景にはどんな事実があるのか、どんな状況があるのかを自分の目で確かめ理解した上で、それぞれの子どもたちへ寄り添っていきたいと考えている。

－報告4－⑦

みんなの話 きけてよかったわ（大阪府人連）

－主な質疑と意見－

大阪 Bさんが登場していたが、Bさんがどのような様子の子どもであるのか、Bさんに対してどのようなアプローチをしていったのか教えてほしい。

報告者 B自身にも課題はある。4人兄妹で、下の子の世話をすることがある。自分に自信がもてず、担任の言ったことの逆をわざとしようとするところがある。そのような学校の様子を伝えていくと、保護者の方も同じように思っているということ共有することができた。共有できたことで、様子を見守りながらプラスに行動した時に、称揚していけるようにしていくこと保護者の方と相談することができた。

奈良 Aの周りの子どもたちが関わろうとしていることが伝わってきて、よい報告を聴かせていただいていた。Aさんが学級で自分のことについて話そうとした時があったが、その前後で家庭訪問など、保護者の方と連携を何かしたのか。

報告者 家庭訪問について、今までは「何で家庭訪問に進んで必要があるのだろう。」と思っていた。しかし、保護者の方と話をしていく中で、自分自身が保護者と子どもについて話すことが楽しくなってきた。話をしたことが良い方向に作用するので、子どもにとっても意義のあることだと思うようになった。さらに、先輩教諭から、子どもの生活や気持ちを知らないまま関わるのは怖いことだと言われた。さらに家庭訪問の大切さを感じた。だから、事前にも家庭訪問に行き、Aについて話を聞いておくようした。

徳島 生い立ち学習を実践する際に、どんな配慮をしたのか。

報告者 前年度の担任教諭から子どもの実態をこまめに聞いたり、職員室で他の教諭に相談したりして、学習を進めてきた。学級懇談で保護者の方に、事前にも「生い立ち学習をしようと思っています。」と伝え、保護者の方と相談することも行った。

大阪 家庭訪問や自己開示などについて、どのような仕組みやどのような研修を行っているのか。

報告者 学校として、ルールや仕組みとかがあってもいいが、先輩教諭の方から家庭訪問の大切さなどを教えてもらってきた。また、同和問題についてあまり考えたことがなかったが、地域の方や先輩と話をしていく中で、自分の中に学びや変化があった。同和問題について話をしていた中で、「怒りでは、差別はなくなる。」と言われ、差別に対して感情的に向かい合うのではなく、仲間を増やし立ち向かっていくことについても教えていただいた。

－報告5－⑨

「わたしは、人にきつくゆったりする、からちよつとずつなおしたいと思った。」

～A さんとともに変われることを信じ続けて～
(奈良県人教)

－主な質疑と意見－

大阪 報告を聞いていて心が苦しくなった。かなりAさんに突き付けている部分があるように感じた。Aさんの言動にある背景をどれだけつかんでいたのか、また、Aさんを支える周りの子どもの姿はあったのか教えてほしい。

報告者 Aさんは魅力的な部分もたくさんあり、ほとんどの友だちはAさんと遊びたいと思っている。でも、一緒に遊ぶと様々なトラブルがある。子どもたちの関係性としては、みんながAさんを支えているという環境はある。私とAさんとの関係性の中でこの取組ができると判断をした。Aさんでなかったら違う方法をとっていたかもしれない。この取組をすることでAさんが変われることや周りの友だちとの関係性が変わるというのが描けていた。

大阪 今、綴り方のことを勉強しているところなので参考になる報告だった。この取組をする中でAさんの周りの変化について教えてほしい。また、Aさんの行動の背景にあるものは何なのか気になる。Aさんの綴った文章の中で「母と似ている」というものがいくつかあったが、Aさんと母親の関係性についても教えてほしい。

報告者 生活綴り方の取組を通して学級全体に自分の気持ちをみんなの前で出していいんだという雰囲気生まれていった。Aさんが変化していく様子を感じながら、今ならAさんにこのことを言っても大丈夫かなと思える子が増えてきた。また、Aさんについてのことを綴ってもそれに対するAさんの反応をみんなが予想できるようになっていった。他にも「Aさんが変わるなら、おれも変わる」という言葉も友だちから出てきた。Aさんの姿をきっかけに自分自身のことを見つめなおし、綴ることのできる姿もあった。Aさんの母親は非常に忙しくされており、短時間で子どもを叱ろうとするとどうしても厳しい口調になってしまうという子育ての実態があった。しかし、子どものことは溺愛していた。Aさんも母親のことは大好きだった。学校に対しても自分の思っていることが正しいとはっきり意見を言う姿が何度かあった。

熊本 報告の中で、何人かの保護者がAさんや母親に対する話を学校にしに来られているが、具体的にどのようなことがあったのか知りたい。また、その後その保護者がAさんの保護者を見る目は変わったのか教えてほしい。

報告者 Aさんの母親が忙しくしているのを周りの保護者は知っており、子どもを保護者が迎えに来ないといけないうときにはAさんを一緒に連れて帰

るとい保護者同士のつながりがあるように思っていた。しかし、実際にはAさんの母親が一方向的に連れて帰ってほしいという願いを周りの保護者に何度も繰り返していた。その当たり前のようにお願いされることに対して周りの保護者は困っていた。また、何かトラブルがあったときにAさんに非があるのに認めてくれないというAの母親の姿がこれまでにあった。Aさんが変化することによって周りの保護者のAさんや母親に対する見方は少しずつ変わり、苦情のようなものもなくなった。

山口 自分自身を見つめて綴るということが、子ども同士をつないでいくことにつながるということがよく分かった。人権作文では自分自身を見つめて書くことが大切だと話があったが、そのことを子どもたちにはどのように伝えているのか。また、人権作文を聞き合う活動をされているが、みんなの人権作文を聞き合った後にどのように子どもたちに返したのか教えてほしい。

報告者 奈人教の人権作文集の3つの作品で学習に取り組んだ。自分たちのクラスの課題と重なるものを見つけてきた。15人の子どもたちがそれぞれ自分と重なるテーマのものを見つけて作文を綴った。人権作文を読んだ後のことだが、この時は時間がなくて交流した後に感想を出し合うということができなかった。今思えば反省すること。

三重 AさんのくらしのどこをAさんに見つめさせたのか。学校でのことは人権作文にも書けていたが、家庭でのことについて聞きたい。

報告者 週末の宿題の中で作文を書かせることがあるが、家庭での生活のことを書いてくる子が多い。実際にAさんも、休日に母親と一緒に過ごした内容を作文に書くことがあり、作文の内容を見てもAさんがひとりで書いた作文ではなく、文章からその作文に母親も関わってくれている様子が伝わってくる。Aさんは作文を書きながら、母親がいるから素敵な生活や経験ができるということを感じている。

福岡 生活綴り方をするとき大切にすることは、子どもがどれだけ自分の生活を見つめているかということや子どもの変容だということが昔からよく語られている。学級の子どもの綴りを他の先生と一緒に議論していく場面はあるのか教えてほしい。

報告者 若い先生がとても増えている職場の中で生活綴り方の話をしても知らない先生、初めて聞いたという先生が多いのが実際のところ。私の今の仕事や活動のテーマは「人権教育の継承」だと思っている。その中で、生活綴り方の話を学校の中で研修のひとつとして伝えるということをしている。

大阪 集団づくりの中では「高め合う」ということがとても大切だと思っている。その中で、しんどい

ことを出し合えたり、言いにくいことを言えたりする関係というのはとても大切だと考えている。最後に質問。このような取組をした子どもたちの今の姿について教えてほしい。

報告者 この子たちは今5年生。先日この子たちの研究授業を見せていただいたが、自分の思いを共有することを大切にされた授業だった。ずっと「自分らしさ」を大切にしていたが、今もありのままの自分を出すことのできる環境で生活してくれている。Aさんも自分らしさを出し、違いを認め合いながら過ごすことができている。

Ⅲ 総括討論

視点①: 今のなお、差別が残っている実態・現実について確認をする。

視点②: 差別をなくすための具体的な取組とそれによる子ども・保護者・自分の変容について共有をする。

視点③: 同和教育の取組の中で昔から大切にされてきたことを、これからも持続可能なものにしていくためにどうしていったらよいのか。

奈良 香川県の土庄町の取組が素晴らしいと思った。毎週のように子どもに関わる様々な関係機関の人が集まり情報交換をするということが続いているのが嬉しいとも思う。しかし、全国的にみると「同和教育」が「人権教育」と名前を変えたころを境に、昔から大切にされてきたことが継続されにくくなっている現状に対して本当にそれでいいのかなと思うことが多い。自分自身の問題として問い直していかなければならないと思う。また、人権に対する感性も非常に大切。学校で子どもと関わる中でそのような大切な感性を育てていきたい。また、自分自身と部落問題との出会いというものもずっと大切にしていきたいと思う。差別に対して自分事として考えることはできないのかということを中心に考えている。最後に、様々な場面で「寄り添う」という言葉がたくさん使われているが、「寄り添う」とは何なのか、言葉の意味を問い直していきたいと思う。

福岡 同和教育をどのようにして継承していくのかという問題に対して危機感を持っている。若い先生が諦めてしまうということが多い。でも、そのような先生だからこそ厳しい環境に置かれている子どもに寄り添うことができるのではないかなと思うことがある。自分の課題と子どもの課題の中で様々なことを考えてほしい。自分が伝えること、伝えるために学ぶということ大切にしていきたいと思う。

大阪 部落差別と出会ったときに、「おかしさ」に気づき、伝えることができるように力をつけたり、つながりを作ったりすることがとても大切だと思う。

現状を考えたときに、ネット差別は切り離すことができない。目に見えない差別で苦しむ人がたくさんいる。まだまだ差別の厳しさは社会の中にあるということ、その差別と自分は関係があるんだという感覚をずっと持っていたいと思う。

三重 私も今非常に厳しい環境に置かれている子どもを担任しているが、その背景には部落差別がある。そのような中で、どうしたら部落差別をなくしていけるのかということを考えてながら生活している。今学校では、今まで言うことができなかったことを少しずつ話してみるという取組をしている。ただ、自分のことを話せたからといってその子の生活が大きく変わる訳ではない。しかし、家庭訪問や子どもと関わる時間を増やすなど、子どもの背景をつかむ時間を大切にしている。特に、家庭訪問は自分ひとりですべてではなく、様々な教職員でチームとして取り組むことができている。

熊本 子どもの暮らしから学ぶという視点が各報告からあり勉強になった。熊本の報告の中に「教師の変わり目にこだわればいい。」という言葉があった。私もたくさん子どもや保護者と出会う中で、教師自身が変わっていかないといけないというように思うことが多々あった。

奈良 時間のなさを日々痛感しながら仕事をしているというのが現状。学級の中に不登校の児童が複数おり、家庭訪問を大切にしているが、それだけで放課後の時間がなくなり、でも他の仕事はまだたくさん残っており、と悩むことや後悔が多い。学校全体で様々なことにチームで取り組める環境がとても大切だと思う。持続可能な働き方と自分の大切にしていることの間での働き方の工夫があれば教えていただきたい。

奈良 時間がなくて、という思いは本当によく分かる。でも、家庭訪問は大切にしている。「どうして家庭訪問をしたのか。」「家庭訪問をする中で何が分かったのか。」という問いに対して自分の中で明らかにしていきたい。同じ職場で働く同僚としては、家庭訪問から帰ってきた仲間に対して「どうして家庭訪問にいったのか。」「家庭訪問をする中で何が分かったのか。」という問いを投げかけることを大切にできる環境でありたいと思う。

福岡 昨日からの話を聞いていて、先生方がこだわりを持って、子どもたちと深くつながり、見えてきたものを大切にされている様子がよく分かった。家庭訪問に行けばよいことがたくさんあるのに、今の現場ではそのチャンスを失っていることがある。様々なことに対して、現状が当たり前だと思わずに声を上げていくことが大切だと思う。

IV 2日間の総括(まとめ)

最後に5人の報告者から一言をいただいてからまとめに入った。

報告者 2日間を通して差別の現実学ぶということができたのではないかと。まずは、知らないこと、知ろうとしないことにより苦しんで子がいるということを改めて感じた。家庭訪問の大切さについても、子どもや保護者、家庭の背景を知るためには欠かすことができないことだと確認することができた。様々な人権教育をする中で、差別をなくしていきたいと思える子どもを育てていきたいと思う。今研究大会の地元テーマ「つなぐ かがやく ゆめひらく ～だれ一人とり残さない社会の創造をめざして～」という現実について2日間を通して確認することができた。